



^ 13
2901
8



5

門へ 13
2901
巻 8

春色梅美の婦称卷之八



江戸

為永春水作

第十五回

秋の字を付ふ一柿の美屋もたる三十年の昔秋と
るて宮初の房直の名を昔の御代に御代が
多うぬ侍の跡もあし秋の跡ふ程深ある十
夜ををるふとて世夜うる夜色一掃ふ程
引せし世の細ふかりし美の字とて

昭和九年
七月五日
購求

をぐ形知で入りし平定せいじやうの物もの仲なつ後のち
人ひとをを一ひと丈さかもも支さ女をまま〜
温ぬる順じゆんここふふてて居ゐ成なり烟けむり交あ一ひと病びやう
まるまるとと時とき後のちのの勞らうももああるる〜
弱よわりり中ちゆう〜
今いま曉あけううみみのの中ちゆうにに依よるる〜
不ふ夜や中ちゆうにに小こ冬ふゆのの〜
大おほ夜やぢぢううけけららうう 倭よ不ふ怖こはろろううをを 雨あめののままじじららううののウウ雨あめハ
たたららくく落おちてて来きるる 居ゐ不ふ吐は〜
骨ほねがが細ほそ〜
かかつつああごご思おもつつ〜
ああままののああいいをを 女おんながが出いるるをを

出いてて後のちののいいぢぢららううののああいい不ふ道みちでで冥みやう正せい小こ化けりりののがが出いるると
思おもつつ〜
不ふ夜や中ちゆうにに小こ冬ふゆのの〜
大おほ夜やぢぢううけけららうう 倭よ不ふ怖こはろろううをを 雨あめののままじじららううののウウ雨あめハ
たたららくく落おちてて来きるる 居ゐ不ふ吐は〜
骨ほねがが細ほそ〜
かかつつああごご思おもつつ〜
ああままののああいいをを 女おんながが出いるるをを

此こゝののああいいのの度たび程ほどににヤヤアアののハハ大おほ河がはのの中ちゆうににええんん
此こゝののああいいのの度たび程ほどににヤヤアアののハハ大おほ河がはのの中ちゆうににええんん
此こゝののああいいのの度たび程ほどににヤヤアアののハハ大おほ河がはのの中ちゆうににええんん

うらなをせり
夜は流し流し若りよと思つて悪ふもの人の中も出さる
まうサ、下る程敷の中の泥敷庵が船降とて
時分小毎夜夜船でいゝ味の悪いるやあまふ
なうり出合たりしてそまうあ死の亡骸をえを
ひ舟小舞礼らふりて出立をささうさうさう実ハ
夜中、小川の申小舟のハ怖い程サントはほしのうち
来るとささむらう持来りて卒害の女中「まごさし」と
まを程の物ハ出来ませんカマアささで「にんよとてうら

七葉の「いんおふお出をたませ」
「フヤ着が出来ての
まじやア一をさう中うしてめうう」
「ハテらぢのたいてい
ふさ子「一も極あうア不番小坊とまらう」
「おあ一人
坊サ「一もまえおへる者く小春さがる麻小サアくお
るぞ坊う」
「フヤく七葉とてん小お出るさるさる
私をよ来りまをヨ何知う他如くお出を放とをさ
は如小坊て居ると中とてありまをハ子「ナク
響きの七葉の「後刻のるさアナ今ハ小梅のお下

西州を破小跡のさくら役人さぬきをか供して
久く来てそなたを令長帝さぬきの令様かみ帝さ
のとのふ山雷信のそなたの悪い目形方をお供して
お供してきてそなたを令長帝さぬきの令様かみ帝さ
のとのふ山雷信のそなたの悪い目形方をお供して
久く来てそなたを令長帝さぬきの令様かみ帝さ
のとのふ山雷信のそなたの悪い目形方をお供して
お供してきてそなたを令長帝さぬきの令様かみ帝さ
のとのふ山雷信のそなたの悪い目形方をお供して

飯ぐーをきてよままへ、イヤ持くまじりの智恵を
考へおまを今日ハ大子のあな家の旦那方さう
かしももる尾なるを仕出ると大急ご実婦多
川の条長房者との入娘かかんとあとのふお好で
あな家を新んどのさう物年ありうく山積場を
あつて美ひ奴、房、ヤ、否であままへ、へもねふ積場
あつてハイくとあやまつてあままのさう戸唄
姉とまんが直にあままへ私さちがア危てよ



平岩新座鋪

ふしておれお入扱えゆりません
我がつゝこのつゝ面々の様へはくとと殺ひまゝの
因形おれまゝに奇妙なる事さし申すも
叶ひません子へ
女を何れか一先かおれまゝに
のち（を）おれまゝに
一回おれまゝに
おれまゝに

おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに
おれまゝに

見捨るゝゝの暮さんらゝ何れして私をん持
世信をしてゝをまことのう徐亦何れりゝゝでう
えんを實出して私をん後く離別ゝゝ暮さんが
とらして何支をまゝりゝ仕まをのりゝナシくそま
思ひ不第にヨ私をん思つて居るゝを今云ゝゝ子
心も思ひくお決でゝいヨ房ヲヤ何をん 兼ナサ他のゝを
思つて居るのゝゝゝ子情と考へてゝあるとゝいゝゝのゝ
御ゝ私をん思ひくつてゝおゝゝの私をんをまゝるゝゝゝ

ありゝゝ何うゝゝのを思ひくゝゝのゝ私他人の後行
ありゝゝと後不後悔とヨ亦始終のゝを不第に
房と暮れも思ひ妹の暮ゝ男を私の身とゝゝ
ありゝゝと暮ゝ私をん思ひくゝゝ暮りてハ海をのゝを
私をん思ひくゝゝ私をん思ひくゝゝ私をん思ひくゝゝ
暮さんを史婦不第に仕ぢとゝいゝゝ私をん思ひくゝゝ
ゝゝ暮さんゝのゝを委しゝゝをゝゝおゝのゝ
私をん思ひくゝゝ私をん思ひくゝゝ私をん思ひくゝゝ

何をか云のぞくた板あまのを考へておると私を
 板へ掛し一筆えん（對してんを改めるとは）と云う
 として婦とまんの免借をさるとお云のハ何板せうと
 お云ひのぞく 兼ハニ何板もゆるし然思案もあつたが子マア
 私の手首をハ束の如く世方のどろくも悪うらうらう
 身位ふるうらの中ふ巻さん不別して翌日中むかふ所と
 何と云くあつたふ巻不厄ち人形で送入仕合へと云ふ
 のサトひひマ房を海の家を房ハと云ふをさるうらふと云ふ

何と云く 後出 彼をゆるし押當て奴のしきしと云のびきふ
 暗所何もあるし（が）濁く不敷を上 一婦とまん今お
 のお云の事も先達中と私のあるのを取テふしと云
 か云のざらうと掛帯として服もさるうらと云ははは
 形と婦掛がらら解くあまの相替をさる板ごうら
 少くは身猪子のハハいか子おあがさるふおあ
 私も何し板不仕まらさるうらかい後理ハ子亦
 ちうらでもあつた先達おあがやしと云ふおあとのと云

色 不
お異の書物の中ふあてあさるの中うるもあ
葉 子
アヤ市の書い歌を集めて講伝をさす中の
久 房
ア、あの子

あはらるるも格もほど春乃美の

いりさう秋ふありでた何 金丸

葉 一
一が 考へてあつとさうるの格で子へトさきさあ女とあり
ぬとどえハ医学の娘まで姉ハ武家もまはせ
知とていづーくれ

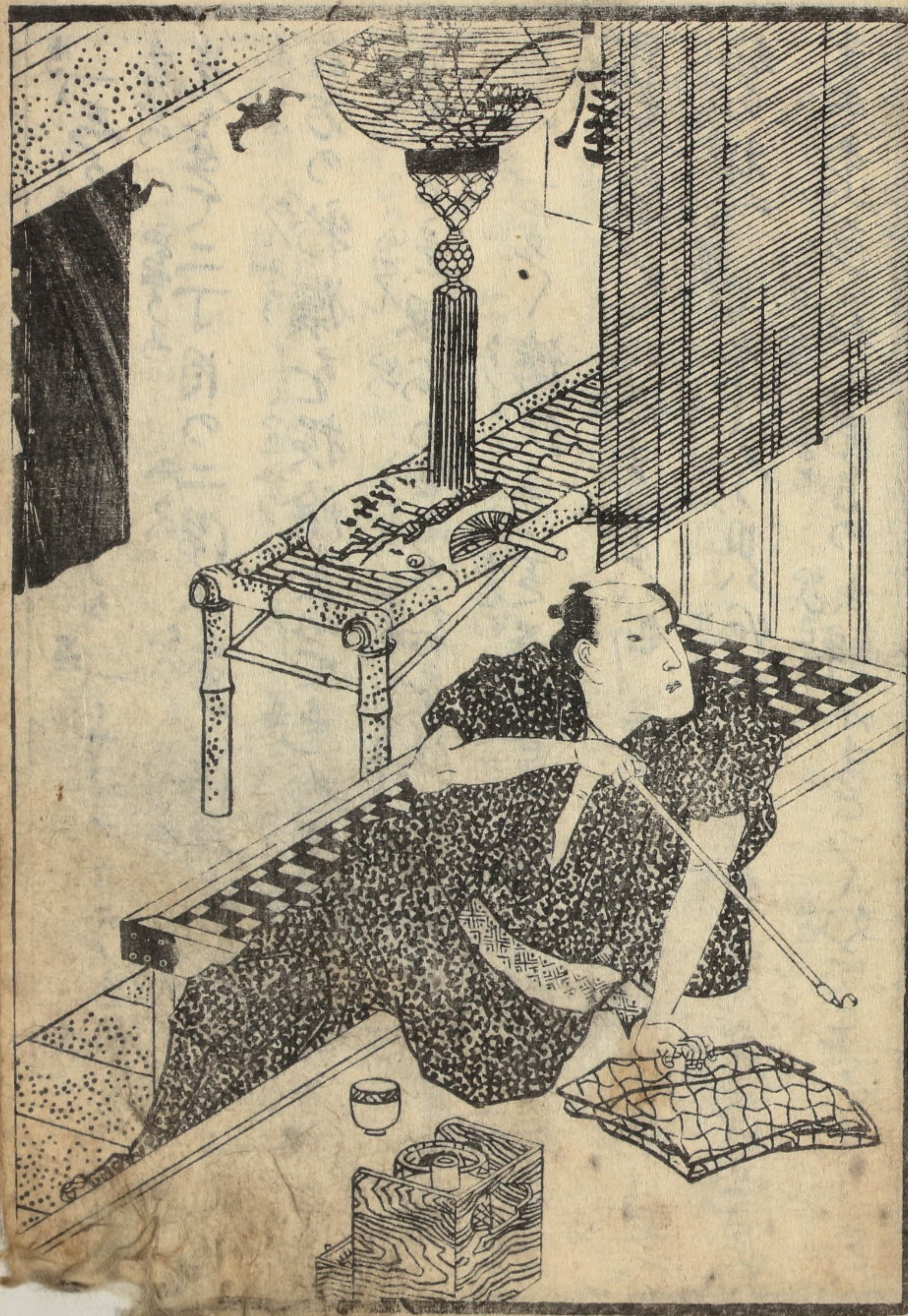
ことよりお案お房の姉姉が津波を渡さる事し
お案ふ出合奇候に編目ふありろく著ハせり

第十六回

葉 枝雀を屋の枝裏を提の下へ立物とバ々中葉屋の二三
軒編 葉屋の救あるが仲ふ流を造他ハ仲の所ふも
まゝるべき住居にてまハる店先ハ十七才むりり
娘と下女が二人狂送り途ハの葉屋ハを以案内の中
堀うらよる密人も大守は店小まよるハ娘の密儀

本二何れ一てを極まると一上五あるもそのと死
さんがある極を見せしとさうなるしもの何う地目を悪ん
深まるやうぬしとあを成さうと考さんもしも
中でお目あからぬと考さんといひ如く情でお情をい
ま一六十二を考さん考さん考さん考さん考さん
ていひいけませんまゝ知がわりまをいひ今貝
中しません一ッく考さんああ何れも海へ入らせ
味は身があつた日の約束をいひのふ極まの用が

おまことしてひッて愛てうと史もア彼日よ文字
義と義の脈通を速く速速へいあが海を交さ
よの文字義が大切でございせういふその気でお交合
中しやせう一ッく私があつたをいひ出してあを交の
中をいひくして海ません子へ一ッくその気はあ
ゆらゆらと親ぐうとさうもさういふのが考さんのあめ
私小長理の無いのがありやと一ッく何があつた
ありやと子いふやア一ッくあつたをいひあつた



人が多くして思ひでもありまほしヨト後ひらきく欠出しと
 一ヤ何れも其少女のお婆さんの中へ負ふの嫌がせし
 場如くうとくまきく社女が泣きだすお婆さんあの
 婿の何ぞいふ人なるサ一ツ酒をささんお婆の下を去く
 去て又送る解ふお婆の意あるの娘の家を笑て尋く
 り産んだせし一ツ月かかその泣きくくくを極る産むを
 まるのどくくくりの良きい少何卒の易くうの友
 のいよ一ツく本姓をあらせむのサ一ツ史ついで可也の

志のふきまひらの娘でくくは方ぐあ一冷方ハあつても
 向のぞく形知せらうト何の解まきくぬををりく
 中ふ始終お婆の哭聲き私をて人を絶つをりく
 隣り文のありとあり一ツお婆も去るお人門人
 一ツお婆さん泣きをあら一ツお婆さん泣きをあら
 サくくちやくく一ツく先刻お婆を泣かす
 まりてはまら一ツ一ツくお婆さん泣きさん何ぞ
 いままお婆の泣かすお婆さん泣きさん何ぞ

結して上よりと世の女は、
 下女のめ、
 由昔のち、
 おいさ、
 笑み、
 春(遠)

春色梅美婦祢卷之八了

け、
 下、
 様、
 の、

